

コロナ禍における国際交流の新たな取り組み

国際交流センター助教	かぶらぎ 蕪木	えみ 絵実
国際交流センター准教授	おたち 御館	くりえ 久里恵
国際交流センター教授	いけだ 池田	れいこ 玲子
国際交流センター長	やすのぶ 安延	くみ 久美

1. はじめに

大学での高等教育、特にグローバル教育については、今後の激しい社会変化に鑑みて、教育内容やその方法を常に検討改善していく必要がある。実際、2020年の新型コロナウイルス感染症の大流行は、世界各国が国境を閉鎖するほどの大きな社会変革を起こし、世界の日常が一夜にして激変してしまっただ。こうした中で、世界の教育も大きく様変わりせざるを得なかった。日本では各大学が次々と施設を閉鎖したため、学生たちは学習の場を教室や実験室から自室のパソコン画面へと切り替えることになった。鳥取大学でも、2020年4月の新学期から全部の対面授業を見合わせると同時に留学生の受け入れを中止し、さらに本学で実施している全ての海外派遣プログラムも中止することになった。このような状況下で、各高等教育機関の海外研修や海外インターンシップなど海外現地での学習については、急遽テクノロジーを駆使して従来の授業にかえてオンラインでの学習機会を開発するようになった。鳥取大学国際交流センターでも、学生の異文化理解力等育成のために、海外の協定校との協働による学習プログラムをオンラインで実施するなど、今後のグローバル教育開発に向けた新たな方策を模索した。こうした経験をもとに、with コロナ、ポスト・コロナ禍でも、学生が積極的・継続的に異文化に触れる機会を増やしながら国際感覚を身につけられるよう、海外協定校の現地学生や、学内の留学生とのオンラインを通じた新たな交流プログラムの実施を試みている。

本稿ではまず、既に国内高等教育機関で実施されているオンラインを利用したグローバル教育を概観した上で、本学国際交流センターがコロナ禍で実施した新たなオンラインによる異文化交流の場づくりの試みについて報告する。

2. オンラインを利用した国際交流

海外での異文化交流体験を学生のうちにもつことで、学生たちの異文化に対する興味・関心が引き出され、外国人に対する苦手意識も軽減し、今後のグローバル社会の構成員として身につけておくべき異文化理解力、異文化間の問題発見、解決力が高まることが期待される。しかし、学生によっては、時間的・経済的理由や個人的な事情から、海外経験をもつことができない場合もある。一方で、オンラインによる国際交流であれば時間による制約は少なく、費用をかけて海外にわざわざ足を運ばなくても、オンラインツールの取得だけで日常生活の中で容易に外国人との交流を体験

することができる。このように、世界中の人々と比較的容易に「つながる」ことのできる交流方法は、より多くの学生たちに利便性の高い有意義な異文化コミュニケーションの場を提供することができると考えられる（植田 2016）。オンライン交流の中でもとりわけ有意義だと考えられるのが、「バーチャル・エクスチェンジ」である。教育者やファシリテーターの指導のもと、地理的に離れた学生/パートナー同士で異文化交流や協働作業などを行うことを「バーチャル・エクスチェンジ（V/E）」と呼ぶ（INENT project group 2015）。V/Eは、ヨーロッパやアメリカで盛んに行われてきたが、最近では新型コロナウイルスの大流行によりアジアを含め世界的にますます注目を集めている。

オンラインを利用した交流は当初、第二言語の習得目的として多く行われてきたが、同時に異文化コミュニケーション能力の強化にも役立つことが既に様々な先行研究からも明らかとなってきた（Kongrith and Maddux 2005, Mendelson 2009, Hagley and Thomson 2017）。現在ではこれらは大きく①異文化理解型、②課題解決型、③共同プロジェクト実施型、の3つの手法に分けることができる。①の異文化理解型は、前述の第二言語の習得目的としても行うことができる。一方、②課題解決型と③共同プロジェクト実施型のようなオンライン交流は、教育者やファシリテーターの指導のもと、異文化間の交流や海外にいるパートナーとの協働作業をオンライン同期型と非同期型を組み合わせながら長時間行う教育的なアプローチに用いられている（O' Dowd 2018）。②や③の手法は、学生の批判的思考や、持続可能な社会の構築のための課題解決力などの養成を目的とした「グローバル人材育成」の教育プログラムの一環として用いることができる（Leask 2015）。これらのオンライン交流は、そのアプローチによって様々な呼び方があるが、日本の高等教育で多く実践されている代表例として、「Collaborative Online International Learning（COIL）」がある。COILは、オンライン上における表面的な交流ではなく、分野間の壁を越えた「ワンチーム」としての仲間同士の対話を通じた創造的学習である「ピア・ラーニング（協働学習）」の取り組みを推進している（IIGE 2020）。IIGE（関西大学グローバル教育イノベーション推進機構）によるレポート（2020）では、V/Eの課題点として時差と安定したインターネット接続を挙げている。また基本的にV/Eは学生主導で行われることが多いものの、相互のファシリテーター/教育者による指導が必要であり、指導の有無が学生の異文化理解度や得られる気づきなどに大きな違いを生み出すことを指摘している。

このように、オンラインを利用した交流を行う場合は、オンライン周辺機器を充実させること、スクリーンを隔てた教育者同士が交流の目的について相互に理解し、十分な準備を重ねた上で行う必要がある。特に上述の課題解決型や共同プロジェクト型の交流の場合、地理的に離れた教育者間で慎重なプログラム設計が必要になるため、教育者側にとってある程度の負担となることも考慮しなければならない。

3. オンライン交流プログラムの実施報告

3-1. プログラム実施背景

グローバル人材としての能力を養うことを目的として、学生の国際交流活動や学習の動機付けを

促進するために開発された、鳥取大学が推進する学内の教育プログラムに「TOUGH プログラム」がある。この「TOUGH プログラム」の 2020 年度新規登録者は 51 名、そのうち 45 名が 1 年生であった（表 1）。また、プログラム登録の際に行ったアンケート調査によると、ほとんどの学生が「登録した動機」として国際交流や留学に興味があり、また将来は海外と関係のある仕事に就いてグローバルに活躍したいと考えており、「身につけたいこと」として語学力やコミュニケーション能力、自分の意見を正確に伝えられるようになること、国際的思考力、などを挙げていた（図 1、図 2）。このように、コロナウィルスが特に猛威を奮っていた 2020 年春期時点においても、学生の国際交流やグローバル教育に対する関心が高く、またその傾向は大学に入学したばかりの 1 年生の間でより一層高まっていることが見受けられた。

表 1 2020 年度 TOUGH プログラム登録者内訳（単位：人）

1 年生	2 年生	3 年生	計
45	6	0	51

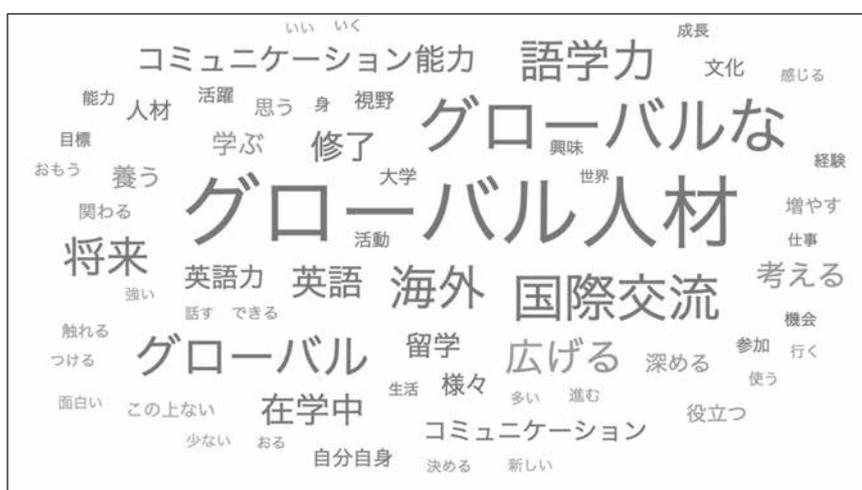


図 1 TOUGH プログラム登録時アンケート調査

「登録した動機」に関するテキストマイニング分析結果

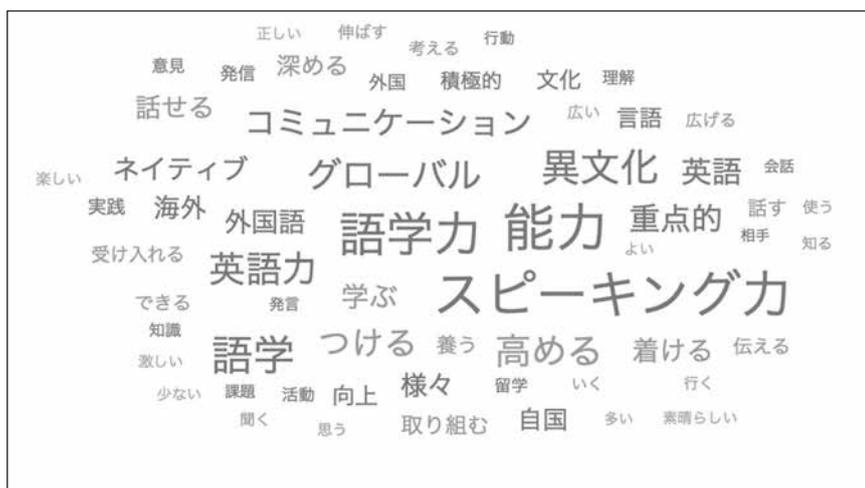


図 2 TOUGH プログラム登録時アンケート調査

「身につけたいこと」に関するテキストマイニング分析結果

夏に海外協定校とオンラインで行った海外実践教育プログラムの説明会は、従来の説明会の場合 60 名前後の参加者であるのに対し、93 名もの学生が説明会への参加登録を行なった。実際には、夏季休業期間が短縮された影響で集中講義などと日程が被る学生が多く、最終的なプログラム参加者は 70 名であったものの、パソコンとネット環境さえ整えば参加できるという手軽さに加え、物理的な国際交流が抑制されている今だからこそ、学生の海外への関心が高まっていることがうかがえた。

こうした現状を踏まえ、国際交流センターでは、国内にいなながらも〈学生が異文化に触れる機会〉や〈国際感覚を身につける機会〉を提供することを目的として、次のようなオンラインを利用した新たな国際交流プログラムを企画し実施した。

3-2. 実施したオンラインプログラム

国際交流センターでは、コロナ禍において、学生が異文化に触れる機会を増やし、さらに国内にいなながら国際感覚を身につけられるよう、「Online World Café」と題したオンラインを利用した異なるタイプの国際交流プログラムを企画した。特に日本語 Café と English Café については、国際交流センター公認の学内国際交流サークルである G-frenz の有志チームが企画・運営に携わることで、学生が主体的に関われるように工夫した。国際交流センターが現在までに実施したオンラインプログラム（夏期に実施した海外実践教育オンラインプログラムを除く）を表 2 に示した。

表 2 2020 年度（12 月時点）に実施したオンラインプログラム（Online World Café シリーズ）

プログラム	実施日	主題	参加者	
			日本*1	海外/ 留学生
(1) 日本語 Café	① 10 月 1 日	世界最後の日に食べたいものは何？	7 名	6 名
	② 10 月 15 日	オノマトペ、イスラム教について紹介	7 名	6 名
	③ 11 月 12 日	日本の名前（由来・キラキラネーム）	7 名	7 名
	④ 12 月 10 日	日本と外国のことわざを比べよう	8 名	4 名
(2) English Café	① 9 月 10 日	英語で質問する練習をしよう	5 名	5 名
	② 10 月 6 日	新入留学生と友達になろう！	14 名	10 名
	③ 10 月 27 日	コロナ禍での過ごし方を紹介しよう	10 名	5 名
	④ 11 月 30 日	カタカナ英語と和製英語	7 名	7 名
	⑤ 12 月 11 日	2020 年を振り返ろう！	10 名	12 名
(3) メキシコ「死者の日」を知ろう！	10 月 31 日	メキシコの「死者の日」の過ごし方について（UABCS の学生が紹介）	7 名	6 名 (UABCS)
(4) 中国・吉林大学 オンライン交流会	11 月 14 日	・故郷の紹介 ・日本と中国のコロナ禍の過ごし方	9 名	12 名

(5) グローバル・キャリア編「国際協力の現場を知る」	① 12月11日	ゲスト：宮本輝尚氏（JICA アフリカ） 「国際協力の種類や方法について」	13名（7名） ^{*2}
	② 12月18日	ゲスト：九笹逸郎氏（JICA 中南米） 「国際協力に必要なスキルについて」	27名（11名） ^{*2}

*1(1)～(4)に参加の日本籍学生の定員は10名とした

*2括弧内はオンライン（ZOOM）を利用した参加者人数で内数

【学内での異文化交流の場】

(1) 日本語 Café

この企画は、日本語を使って日本籍の学生と交流したい鳥取大学の留学生と、留学生との交流や異文化に興味のある日本籍の学生のための国際交流の場として企画した（写真1）。毎月1～2回の頻度で実施し、留学生の母国についての紹介からオノマトペの使い方、日本人の名前、諺など、G-frenzの有志チームが企画したテーマについて参加者全員が一緒に日本語で話し合いながら進行する。留学生にとっては、同世代の日本語母語話者との日常会話の場であることで関心が高く、参加もしやすいだろうと予想された。一方、日本籍の学生にとっては、英語でのコミュニケーションとは異なり母語での交流であるため、英語に自信がなく議論の場に不慣れな学生であっても、日常的な話題で海外の文化を知り自分の文化を語れるもので、参加のハードルが低く、発信力を高めることが期待できる。

(2) English Café

この企画は、英語を使って日本人学生と交流したい鳥取大学の留学生と、英語で話したい日本人学生のためのコミュニケーションを基本とした交流の場として企画した（写真2）。毎月1～2回の頻度で実施し、3～4名の少人数グループに分かれて様々なテーマについて英語で語り合う。留学生にとっては、留学生生活を支えるために日本人学生と知り合い、友人関係が形成される場となり、日本人学生にとっては、各自の英語力向上と英語による実践の良い機会となり、異文化交流体験から得られるグローバル意識の拡大も期待できる。ここで取り上げるテーマは、コロナ禍でオススメの鳥取での過ごし方、カタカナ英語と和製英語等、日本語 Caféと同様、G-frenzの有志チームが毎回テーマを企画し進行する。

【海外との異文化交流の場】

(3) メキシコ「死者の日」を知ろう

「死者の日」は11月1・2日に行われるメキシコの伝統的な行事であるが、アメリカで行われる「ハロウィン」と間違えられることが多い。10月31日に、鳥取大学の協定校メキシコ、バハカリフォルニア州立大学（UABCS）の学生が、この「死者の日」について鳥取大学の学生に英語で紹介した上で、死者の日に必要な祭壇の飾り付けや食べ物、ガイコツ風のメイクアップ方法などについて、両学生たちがグループに分かれてメキシコからの映像の提示によるバーチャル体験をした。

(4) 中国・吉林大学オンライン交流会

鳥取県交流人口拡大本部観光交流局交流推進課と国際交流センターとの共催で、鳥取大学の協定校である吉林大学日本語学科の学生と鳥取大学生が日本語でオンライン交流をした(写真3)。交流会は、鳥取大学G-frenzメンバーと吉林大学の学生リーダーとの共同企画により、当日も両学生の進行により実施した。はじめにそれぞれの出身地について写真を示しながら紹介し合い、次にコロナ禍の生活への影響などについて情報交換を行った。この企画・実施については、両国の学生が交流テーマの決定から当日の会場設営、進行にいたるまで終始学生主体で交流が進められた。

【学内と海外：ハイブリッド】

(5) グローバル・キャリア編「国際協力の現場を知る」

コロナ禍における学生の海外に対する意識向上と、国際協力への関心を高めることを目的として、国際協力を携わりまた鳥取大学と縁のある JICA 専門家、協力隊員等によるミニ講演会をシリーズ形式で行った(写真4)。講演会は、オンラインと対面のハイブリッドで行った。国際協력에興味のある学生が多く参加し、現在行われているプロジェクトの内容や国際協力の心構えなどについての講義を受け、国際協力の現場の生の声を聞くことができる貴重な機会となっている。



写真1 日本語 Café



写真2 English Café



写真3 中国・吉林大学オンライン交流会



写真4 グローバル・キャリア編

4. プログラム実施結果

参加した学生たちの意識を探るため、各プログラム実施後の感想を記述式による回答を求めた（表3）。また、（1）日本語 Café、（2）English Café、（4）中国・吉林大学オンライン交流会では、日本人学生の相手側となる留学生や相手国の学生からのアンケート調査結果を回収することができたため、以下表4に示した。なお、「メキシコ『死者の日』を知ろう」、ではアンケート調査を行わなかった。

表3 オンライン交流プログラム参加後の日本籍の学生の感想結果

気づき	学生回答例	プログラム
(1) 異文化への興味・関心	<ul style="list-style-type: none"> ・ 留学生たちとたくさん話せたことが勉強とは違って楽しかった。 ・ 色々な国の人と交流ができて、とても楽しかった。 ・ 留学生の名前の由来が面白かった。 ・ 自由に話すことができ、また自分のことを知ってもらおうと積極的にたくさん話すことができて本当に良い機会だった。 	(日本語・English Café)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今まで以上に中国に関心を持つようになった。 ・ オンラインのコミュニケーションって面白いものだと知った。 	(吉林大学交流)
(2) 視点の広がり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本人と留学生の観点が違うことが印象的だった。 ・ 色々な人と関わることで、自分の知識の幅を広げられ、とても良い経験になった。 ・ 想像以上に自分が日本のことわざを知らなかったのので、例文を考えるのが難しかった。もっと日本のことを知らなければいけないと思った。 	(日本語・English Café)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一緒に仕事する仲間や同僚のモチベーションの保ち方、関わり方が理解できた。考え方が変わるセミナーだった。 	(グローバル・キャリア)

(3) 学習意欲の向上	・ 留学生からも日本人学生からも多くの刺激を受けた。英語力向上を目指してもっと頑張ろうと思った。	(English Café)
	・ 本格的に中国語を勉強したくなった。	(吉林大学交流)
	・ 今のうちに様々なことを学んでおくことの重要性に説得性があり、学ぶ意欲が湧いた。 ・ 気持ちが少しふさぎ込みがちだったが、何かやってみよう！という気持ちになった。 ・ 今のうちにいろんなことに挑戦したり勉強したいと思った。	(グローバル・キャリア)

表 4 鳥取大学留学生と中国・吉林大学オンライン交流会の中国側感想結果

	学生回答例
日本語 Café	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本人とたくさん話せて楽しかった。 ・ ことわざは知らないものが多く、とても勉強になった。コミュニケーションの練習にもなった。
English Café	<ul style="list-style-type: none"> ・ プログラム内容は興味深くとても楽しかった。今後もこのようなプログラムを続けてほしい。 ・ 1対1で話せたら、日本人学生ももっとたくさん話してくれると思う。 ・ 異なる文化の人との話し合いは楽しい。
中国・吉林大学 オンライン交流会	<ul style="list-style-type: none"> ・ とても面白い交流会でした。今後もこのような活動に出たいと思います。 ・ 年齢の近い日本人学生と話す機会は滅多にないので、本当に素晴らしい経験でした。 ・ 両国の若者があるテーマについて話したり感想を交換したりすることはいいなと思った。

4-1. 学生の内省記録から見えたこと

まず、表3に示したように、日本人学生の内省をみたところ、異文化の学生との交流を経験する中で、(1) 異文化に興味関心を持ったこと、(2) これまでもっていた自分自身の視点の広がりや認識できたこと、(3) 今後の学習への動機づけになったこと、の3つの気づきを読み取ることができる。オンラインによる国際交流の取り組みに対して、ほとんどの学生から「楽しかった」、「良かった」、「今まで以上に関心を持つようになった」などの肯定的な感想を聞くことができ、学生が純粋に異文化交流を楽しんでいると感じ、その結果として異文化への興味・関心を生むことができている。また、文化・社会的背景の異なる留学生との日本語または英語でのディスカッションを通して、「留学生と日本人の観点が違うことが印象的だった」、「色々な人と関わることで知識の幅を広げられた」

など、学生の視点を広げることができた。そして、「英語力の向上を目指す」、「本格的に勉強したくなった」など、学生の学習意欲を引き出すことができた。

これに対し、表4に示したように、この交流の場に参加した鳥取大学の留学生や海外の学生たちからは、日本人学生と話す経験をもったことの感動の声やさらなる交流の機会を求める積極的な参加意欲の高まりが読み取れる。このことから、この活動が決して一方的な交流ではなく、スクリーンを隔てた双方にとって良い学習機会となっていたことが分かった。

グローバル・キャリア編は、他の交流プログラムとは異なり話者による対話を混じえながらの一方的な講義形式であったものの、学生からは「学ぶ意欲が湧いた」、「何かやってみようという気持ちになった」、「考え方が変わった」などの感想が出るなど、国際協力を含むグローバル・キャリアに関する知識の蓄積だけでなく、多様な視点や学習意欲を刺激するような体験を学生たちに提供することができたといえる。

今回の取り組みでは、学生が「国際感覚を身につける」までには至らなかったものの、コロナ禍のように実留学が困難な状況においても、学生が異文化に触れ、異なる背景の他者と関わりながら様々な気づきを得るための手法として有効であることが分かった。また、オンラインでの国際交流が、語学学習への意欲向上や異文化理解力、外国人に対する親近感の獲得などと結びつき、実留学をより効果的なものにできる可能性を見出すことができたといえる。

4-2. 教育的観点から見た本オンラインプログラムの実施意義

鳥取大学が推進している「TOUGH プログラム」は、様々な国際交流活動に参加し一定数の「グローバル活動ポイント」を獲得することが修了要件となっており、その過程で得た経験から、学生がグローバル人材として必要な能力を獲得していく仕組みとなっている。今回実施したオンラインによる国際交流プログラムへの参加についてもこの「グローバル活動ポイント」付与の対象としている。また、TOUGH プログラムに登録した学生には、年度末に「グローバルポートフォリオ」を提出することを義務付けており、国際交流活動を通して学び感じたことを言語化して振り返ることで「体験」を「経験」に変えることが可能となる。こうした作業は学生のグローバル能力習得に不可欠なプロセスである。

中央教育審議会（大学分科会）は、「主体的学び」を大学生の育成をめぐるキーコンセプトの一つとして掲げている。今回実施したプログラムのうち日本語・English Café では、鳥取大学国際交流センター公認の G-frenz チームが主体となって企画・運営を行なった。「どんなテーマだったら議論できるか」、「留学生にとっても興味深い内容になるか」、「楽しんでもらえるか」などを企画チームが議論を通して試行錯誤し、プログラム実施後には達成感を得ることで、「次回も良いものを作り上げよう」というモチベーションが生まれていく様子が見られた。こうした繰り返しの中で、自ら主体的に考え、課題を設定して答えを導く力が育成されていくのではないだろうか。また、主体的に活躍する企画チームメンバーの様子を見た他の参加学生にとっては、「自分も彼らのようになりたい」という活動意欲を引き出す相乗効果も生み出すことが期待できる。

本報告では、プログラムの教育的な効果については深く考察することができなかつた。しかし、

今回実施したオンラインによる仮想的な接触を「単なる交流体験」、「単発的な交流経験」として終わらせないためにも、今後どのように生産的で豊かな学習経験へと発展させられるか、また明確な教育的意義をもち、教育全体の中にどのように組み込んでいけるのかについては、引き続き検討しつつ試行していく必要がある。

5. 今後の課題

ICTの普及や、Zoomなどオンライン交流のためのデジタルツールのおかげで、容易に海外と接触・コミュニケーションができるようになった。しかしながら、現時点では必ずしも実留学や対面での交流で得られるのと同じような「気づき」や「学び」をオンライン交流で得られるわけではないこともよく理解しておかなければならない (Richardson 2016)。

本稿で紹介したオンライン交流プログラムを行った目的は、「コロナ禍において異文化に触れる機会を増やし、国内にいながらも学生が国際感覚を身につける機会を提供する」ことであった。今回、「異文化に触れる」という点については概ね達成できた。一方、「国際感覚を身につける」ことについては、今回実施したような1~2時間程度の交流で達成することは難しく、前述2の課題解決型のように、より多くの時間をかけて教育者の指導のもとで行うプログラムの追究が今後必要である。また、対面での交流ではあまり感じないオンライン上での沈黙の「気まずさ」が見られた。これについては、教育者自身のファシリテーター経験や能力も同様に向上させていく必要がある。さらに、本プログラム中にインターネットの接続が途切れることが何度かあり、限られた時間内での交流において大きな障害となった。先行研究においても既に課題として報告されているように (IIGE 2020)、インターネット接続環境の充実は急務である。with コロナ、ポスト・コロナ禍において高まるオンラインの重要性に鑑みても、オンライン環境特有の課題については、早急に解決すべきものであると感じた。

付記：本交流プログラムの企画段階から実施まで、国際交流課の福澤直子氏と瀬古明日香氏には深くかかわっていただいた。とくに機器の操作、運用の協力を得た。

参考文献

- 1) 植田栄子 (2016) 「多文化共生時代に必要な異文化間コミュニケーション能力の考察: インターネット (スカイプ) による日本語のオンライン交流」 青森県立大学, 2 (1).
- 2) INTENT project group (2015) Position paper on virtual exchange, <http://uni-collaboration.eu/?q=node/996> (accessed in 25 November 2020).
- 3) Kongrith, K., Maddux, C., D. (2005) Online learning as a demonstration of type 2 technology: second-language acquisition. *Computers in the Schools*, 22, 97-110.
- 4) Mendelson, A. (2010) Using online forums to scaffold oral participation in foreign language instruction. *L2 Journal*, 2 (1), 23-44.
- 5) Hagley, E., Thomson, H. (2017) Virtual Exchange: Providing International Communication

Opportunities for Learners of English as a Foreign Language. 北海道大学言語研究会, No.15, 1-10.

- 6) O' Dowd, R. (2018) A transnational model of virtual exchange for global citizenship education. The Sixth International Conference on the Development and Assessment of Intercultural Competence: Intercultural Competence and Mobility: Virtual and Physical, University of Arizona, USA.
- 7) Leask, B. (2015) Internationalizing the curriculum. Abingdon: Routledge.
- 8) IIGE (2020) 「日本での VE/COIL イニシアティブ 日米間および他国の高等教育におけるバーチャルモビリティ: ケーススタディと優れた取組事例」関西大学グローバル教育イノベーション推進機構, I-PAPER.
- 9) Richardson, S. (2016) Cosmopolitan learning for a global era. London: Routledge.